

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「一带一路」構想の中の「鄭和」言説：
中華民族の英雄か，回族の英雄か

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館 公開日: 2017-12-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本, ますみ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008627

「一帯一路」構想の中の「鄭和」言説

— 中華民族の英雄か、回族の英雄か

松本 ますみ

室蘭工業大学

はじめに

習近平主席が、2013年に打ち出し、2014年のAPECの席上で正式に提示した「一帯一路構想」(One Belt One Road Initiatives)は、別名「海と陸のシルクロード構想」と呼ばれている。古代から連綿と続く東西交易の系譜は、21世紀中国の経済・政治・安全保障・文化に関する世界戦略に文明史的意味づけを与えているが、その中でとりわけ脚光を浴びているのは鄭和である。鄭和は約600年前の明の永楽帝の時代、大艦隊を率いて七回のインド洋を横断し何度かは遠くアフリカ東海岸に至る大航海を行った。鄭和下西洋、鄭和の南洋遠征ともいう。彼の艦隊の航路とその寄港地は、東南アジア、インド亜大陸、中東、アフリカ諸国といった現在の中国の経済投資国や外交上の友好国家とも一致する。そこには、経済力で圧倒しつつ政治的プレゼンスを強め、同時に文化的ソフトパワーで世界を席捲したい中国が、鄭和という歴史的人物とその業績を利用したいという意図も透けて見える。

さらには、中国の「一帯一路」構想の世界戦略に組み込まれた国々の多くはイスラーム国家であったりムスリム人口が多かったりすること、さらには華僑・華人も多いという二つの事実をもって、明代に活躍した鄭和を現代の中国と華僑・華人とイスラーム世界を結ぶ象徴的な結節的人物として認識したいという思惑もある。鄭和が雲南出身のムスリムであったことが史料的にも明らかとなっているからである。

本稿は、この歴史的人物のさまざまな側面を誰が、どのようにして、何のために「資源化」しようとしているのか、ということ明らかにしようとするものである。現在、鄭和に関する歴史の「資源化」の内容とは、以下のようなものが挙げられよう。すなわち、観光の資源、国際政治上の資源、経済の資源、外交の資源、安全保障の資源、文化の資源、国内向けの政治宣伝の資源と、枚挙に暇がない。特に、国内政治宣伝面では、回族をも含む56の民族からなる中国国民統合の論理「中華民族の凝集力・中華民族大家庭・中華民族大団結」を強調する時に資源として使われる。その文脈で、鄭和のことを「中華民族の英雄」と讃えたり、場合によっては「回族の英雄」と褒め上げたりする傾向も見られる。特に、「少数民族」にして「中華全体の英雄」である歴史的人物は、現代中

国の政治文化空間ではあまりいない。そういう意味で、鄭和はある種特別のアイコンとして存在している。

そこで、本稿では鄭和言説分析の方法論として、第一に、中国におけるインターネット上の鄭和言説分析、第二に、中国国内とマラッカの鄭和に関する墓や博物館、遺跡の言説分析、最後に、中国国内で開催された鄭和の名を冠した国際シンポジウム、中国国外の国際財団などの動きから鄭和言説分析を行う。

1 鄭和とは誰か？

1.1 鄭和の生涯

議論を始める前に、鄭和について、概説を述べておこう。鄭和（1371-1433）の大航海に関しては、中国はもとより欧米、日本、東南アジア等でさまざまな専門書や一般書が出され、テレビ番組も作られ、かなり人口に膾炙している。日本では高校世界史教科書に必ず登場する。中国の高中の歴史教科書にも詳細ではないがディアス（1450?-1500）やコロンブス（1469-1524）の航海よりもその規模といい技術といい、「道徳」といい、圧倒的に凌駕していた、という語りで登場する [人民教育出版社課程教材研究所 2007: 25]。

彼の生い立ちと生涯については、概説書に従い、簡単に次のようにまとめられる。鄭和は雲南省の滇池の南のほとりの昆陽（現在の晋寧県昆陽鎮）に生まれた。もともとは馬和である。父も祖父もマッカ巡礼を果たした馬哈只（ハッージュ）、母は温氏である。兄がひとりいる。兄は馬文明（あるいは文銘）という。ちなみに、この兄が後に鄭姓を名乗り、鄭和の子孫が現在まで続いている。

もともと馬姓で、父、祖父が哈只であったことから、鄭和はムスリム家系に生まれたことがわかる。馬姓は預言者ムハンマドの Muḥammad の最初の音にちなんだ姓であるといわれている。また、和は、たとえば、ムスリム男性に多い名前、例えば、Hasan や Ḥakīm, Ḥusayn のいずれかの音を当てたものであろう [上田 2013: 116]。鄭姓は、永楽帝から軍功を讃えられのちに与えられたものである。

雲南は元の時代、中国に初めて取り込まれた。モンゴル軍とともにやってきた中央アジアのブハーラー出身のムスリム、サイイド・アッジャル・シャムス・ウッディーン Sayyid Ajjal Shams al-Dīn (賽典赤瞻思丁) (1211-1279) が雲南平章政事という行政のトップとなり統治した。雲南には、多くのムスリムが中央アジアから移り住んだ。技術者、兵士、行政補佐官など、いわゆる色目人である。馬和はこのサイイド・アッジャルの第6代目の子孫とされる [楊懷中 2005]。

しかし、元の衰退し明軍が元の残軍討伐のため1381年に雲南に攻め込み、11歳の少年の馬和は捕えられ去勢された。その後、南京に送られ宦官になったのち、14歳の時、北

京の燕王府に送られた。当時の燕王は朱棣であった。朱棣は聡明で行動力のある馬和を気に入り、手に置いて教育を施した。靖難の役の折、鄭という場所で馬和は戦功をたてた。この戦いの勝利の結果、燕王は皇帝に即位、永楽帝となった。永楽帝は1404年、馬和を戦功があった場所鄭にちなんで鄭和と改姓させた。その上で内官監太監という宦官の長の官僚に起用した。仕事内容は宝物や墳墓の管理であった。のちに三宝太監、あるいは三保太監とも称される〔山本 1934; 白壽彝 2003: 862-864; 荷見 2016: 90-95〕。

鄭和がさらに抜擢され、永楽3年（1405年）を皮切りにした7度にわたる南海遠征（下西洋）の司令官かつ欽差大臣を勤めたのは良く知られている。ちなみに、「西洋」とは明代は南海以西の海洋地域のことで、具体的にはインド洋のことをさす。東南アジア、インド海域は既にイスラーム化が進んでいた地域で、ムスリムの鄭和が司令官として選出されたのは永楽帝の順当な判断であろう〔山本 1934〕。寄港先の地域の民心を掌握するとともに、海域のムスリムの水先案内人の信頼を得、大艦隊を率いての長距離航海という大事業を成就させ、明朝への朝貢という高度に経済的かつ政治的取引を成功させるために、彼の「ムスリム」という属性は功を奏したと思われる。この鄭和の南海遠征（下西洋）は永楽帝の時代のみでも6回を数え、ほとんど休まずピストン運行を行っていた。いかに永楽帝がこの事業を重要視していたのかがわかる。

第一回目の航海では、戦艦（宝船）62艘、随行艦を入れると200艘、兵士27,800人余を乗せた大艦隊を率い、訪問国は30カ国以上。第四回目以降はアラビア半島からアフリカ東海岸まで至った。動物のキリンが初めて中国にもたらされ、吉祥を告げるものとして大騒ぎになったのもこの時のことであった。

さて、明代の海禁策と華夷秩序についての専門家である檀上寛によると、下西洋の目的は以下の通りである。第一に、海禁体制下で朝貢貿易を拡大すること、第二に、各地で明の経済的・軍事的・文化的パワーを示し、朝貢関係を取り結ぶことで、明、特に永楽帝という皇帝＝天子を中心とした国際秩序を確立することであった。それは、同時代に北方や南方に向けて実施された「モンゴル親征」「満洲探検」「安南出兵」と軌を同じくする永楽帝の世界戦略の一環であった〔檀上 2013: 149-150〕。その結果、密貿易を制御し、60国近くの朝貢使節を得た。朝貢関係の樹立には有無を言わさぬものがあった。非対称の軍勢力と国力の差を表す大量の兵士を乗せた砲艦を含む大艦隊で威圧するからである。海外諸国が朝貢関係樹立を求める明の要求を拒否することは事実上困難であった。朝貢関係を拒絶するものには武力制裁が行使された〔檀上 2013: 150〕。

朝貢貿易は、数倍の価値のある絹や陶磁器といった下賜品を朝貢国に与えることで、明側の貿易収支は赤字、朝貢国の貿易収支は黒字となる。しかし、不均衡な大盤振舞の国際経済・政治システムを保持管理することで天子たる皇帝の権威が対外的にも対内的にも高まった。定期航海開拓によって恒常的な貿易圏ができ、国内需要が高まっていた乳香や龍涎香といった高価な香料や宝石という明では手に入らない奢侈品の入手ができ

た。また、それら物品の流通によって明の国内市場も活発化した [寺田 1984: 162]。鄭和の華々しい活躍は伝説化し、千夜一夜物語のシンドバッドとは鄭和をモデルにしているのではないか、という説すら西側にはある¹⁾。

鄭和は1424年に亡くなったが、インドのコルカタで病没したという説と南京で病没したという二つの説がある [上田 2013: 101]。しかし、彼の没後約40年後に報告書は焼却されてしまった。宦官の権勢への警戒と、すでに明が膨大な出費を要する下西洋ができないほど国家財政が逼迫し、鄭和時代の記憶を封印したいという宮廷内の計らいがあったからという [寺田 1984: 69-70]。

それゆえ、『明史・鄭和伝』に短い記述があるほかには、随行員の残した史料である『星槎勝覧』や『瀛涯勝覧』、『西洋西蕃史』以外に鄭和の大航海の記録は少なく、それゆえ彼の亡くなった場所すらも明らかでない。また、彼の没後、明は宣徳9年(1434年)にスマトラに使者を送ったのを最後に南海に使者を送らなかった [寺田 1966: 256]。鄭和の航海の功績と記録は、明末から清にかけて急速に忘却された。それが再び日の目を見るためには、近代の到来を待たなければならない。

1.2 近代以降の鄭和の度重なる「発見」

中国で鄭和の再発見・再評価がされるのは20世紀に入ってからである。

まず、梁啓超による「発見」である。彼が「祖国大航海家鄭和伝」(『新民叢報』第69号、1905年)で発表したのが最初であるとされる²⁾。梁啓超の鄭和紹介文は「祖国」というタイトルを冠されていることから推察されるように、彼の提唱する「新民」の歴史的英雄となるべき存在として論壇に登場した。そこには、列強に瓜分される清末の中国を憂い、歴史を鑑とし、往年の栄光を取り戻したい、という梁啓超の思惑があった。

第二期が1930年代の「再発見」である。1933年に東洋学者ペリオがなした論文 Paul Pelliot, “Les Grands Voyages Maritimes Chinois au Debut du 15^e Siècle”, *T'oung Pao*, 1933, n°30は、伯希和「鄭和下西洋考」として馮承鈞が翻訳をし、顧頡剛が主催する雑誌『禹貢』半月刊 Vol.2 No.1に掲載された [馮 1934]。日本では、ほぼ同時期に山本達郎が「鄭和の西征」として『東洋学報』に論文を発表している [山本 1934]。『禹貢』は1931年の日本の満洲事変後の「東北の喪失」を期に、古典学者顧頡剛が中国と「中華民族」の歴史的地理領域=国土とは何か、を問うて発刊した「愛国的」雑誌である。すなわち、鄭和が「中華民族の誇り」の文脈で中国論壇に再登場するのは、「国土の喪失」に伴う中国ナショナリズムの興隆と関連する。この時期は、まだ鄭和がムスリムであるということは強調されていない。

鄧小平が改革開放路線の先駆者として鄭和を持ち上げた。欧米では Menzies [2002] の本がベストセラーとなったが、中国では特に、2005年の「鄭和下西洋600周年」で、さまざまな鄭和関連の会議やシンポジウムが開催され、研究が爆発的に増えた年であった。

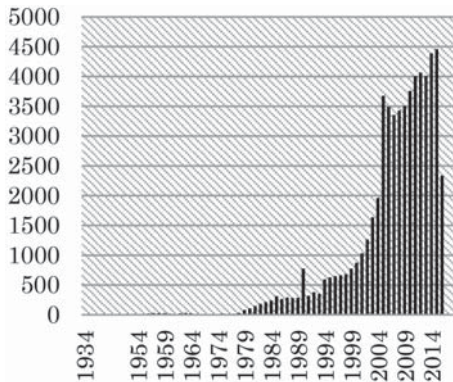


表1 鄭和関係論文数

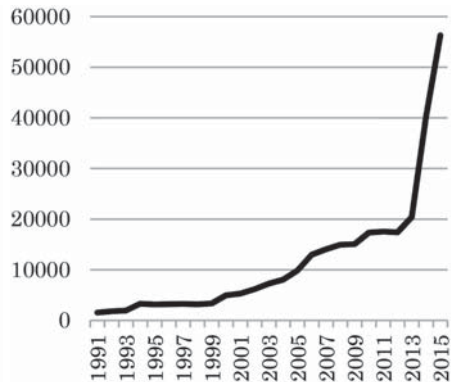


表2 中国のシルクロード関係論文数 337,010

鄭和の艦隊の船員・兵士が寄港地に下り、東南アジアの華僑・華人のルーツとなったとして、中国—東南アジアの血縁関係が大きくクローズアップされた。改革開放の重要なパートナーとして華僑・華人が重要視されるのと期を同じくしている。さらには、鄭和が出航したとされる7月11日が「航海日」と定められたのもこの年である³⁾。この年は、筆者も中国が主催した鄭和国際シンポジウムに招待された（後述）。

第四期が、習近平主席が2013年に打ち出し、2014年のAPEC席上で国際社会に宣言した「一帯一路」または「新シルクロード」構想⁴⁾の中で鄭和が「再再再発見」された時期である。特に、中国の「一帯一路」構想の沿線国に対する直接投資額は、沿線国の中国に対する投資額の1.82倍に達しており、投資過剰状態にある。かつての明朝貢貿易における「赤字貿易」体制を彷彿とさせる。

この時期、鄭和が「回族」「ムスリム」であると同時に「中華民族」の「偉大なる先人、英雄」で中国の世界への広がり象徴する人物として再評価されるようになった。すなわち、世界のムスリムとの紐帯、卓越した海運技術、歴史上も現在も世界を席捲する中国製品・中国資本、パックス・シニカの象徴、アフリカとの交易・投資、東南アジアのみならず中東やアフリカの華僑・新華僑との結びつきなど、スーパー・パワー中国を代表するイメージが彼に結実する。

たとえば、中国最大のデータベースCNKIによると、2016年10月22日現在で、鄭和に関する論文、論説、記事の数は全52,990本で、(表1)(2016年10月21日閲覧)の通りである。鄭和下西洋600周年の2005年が3,674本と前年の約2倍を記録しているが、一旦減少し、2010年からは増加に転じ、2014年には4,385、2015年には4,457と最高となっている。この急激な増加は、明らかに2013年末以来の「一帯一路」構想を受けたものである。ちなみに、「一帯一路」は、2016年10月までの約3年間に255,373本を数え、「鄭和+一帯一路」で検索すると7,017本がヒットする。明らかに、鄭和が「一帯一路」構想の中でクローズアップされていることがわかる。

ちなみに、日本では1970年代から1980年代に大ブームとなったシルクロード（絲綢之路）⁵⁾は中国では約30年遅れて2013年以降に爆発的ブームとなっている。「一帯一路」構想の発表と期を同じくしているのは論を俟たない（表2）

1.3 「一帯一路」構想の中での鄭和の再発見の論理

なぜ、2013年になって、「一帯一路」構想が打ち出されたのだろうか？ 過剰生産の再投資といった経済要因は多くの経済学関係識者によって語られているが [穆 2016]、鄭和言説の文脈では、中国史・中国思想の方面から紐解いていく必要がある。

以下、葛兆光 [2016] の主張に沿って、説明していこう。現在の国際秩序は近代国家システムに基づく。ここでは国際法に基づく国際秩序、明確に国境画定された領土をもつ主権国家が主なプレーヤーである。その近代国家システム参入のためには民主と法治が条件とされる。

一方、伝統的帝国は天下概念に基づく。国境概念はなく、多種の文明・文化を統一し、拡張と包摂が特徴である。外交は朝貢システムである。そこでは国家主権は平等でなく、参入条件として、天子の人治＝賢人政治が必要であった。朝貢国には天子に対する敬服と権威の是認が必要とされた。民主と法治は必要ではなかった。

さて、「一帯一路」構想（2013-）とは、近代国家システムと伝統的帝国（朝貢システム）のアマルガムとしての「天下体系」文化国家の建設をめざすと考えられる。中国の論壇で近年「天下概念」や「天下秩序」というタームが一躍強調されるようになったのは、その証左であるとする [葛 2014b: 142]。例えば、「天下概念」「天下観念」「天下秩序」のキーワードでCNKIを探すと、それぞれ620,474, 344,501, 393,424点ヒットする。いずれも現代中国と世界システムの文脈で研究されているものが多い⁶⁾。

現代中国論壇における「天下概念」の台頭の背景として、葛兆光は第一に中国の国力の勃興と「追求富強」という方向性を挙げる。膨大な人口と膨張した資本を養うための資源と空間の必要性から、米国と日本を除外した「一帯一路」構想が立案された⁷⁾。この構想はグローバル世界での中国の政治経済的プレゼンスの拡大が中央アジア、インド洋、東南アジア海洋域への関心と連環していることを示唆する。反TPP、反太平洋地域の方向性を取るのもそのためである。

第二に、新帝国主義、文化帝国主義批判である。帝国主義の代表とは資本と軍事力で世界を支配する「悪」の米国であるという認識である。その一方で、中国はエドワード・サイードがいう「文化帝国主義」の批判から逃れ、13億の人々が平和に暮す「善」の天下であると自己陶酔的に肯定する。ここには米国や日本が中国にとって最大の貿易相手国で、大量の中国留学生を受け入れているという事象は意図的に捨棄されている。

第三が、中国が、儒学が理想とする「大同主義」に基づく「天下体系」をもつ文化国家としての自己認識である。それが、中国文化発信基地である「孔子学園」の世界各地

での増設とソフトパワーの堅持路線にも繋がる。「中国独自/特色」という言葉に代表されるように、その「天下体系」は西欧的民主国家ではないものの、古臭い伝統帝国でもない、という自己規定がされ、他の価値観との齟齬を回避している。

第四に、天子の徳による伝統的天下統治を現代に当てはめ、正当化していることである。中国は毛沢東時代の「第三世界」のリーダーから数十年でめざましい経済発展を遂げ、今や「旧ソ連」、東南アジア、インド亜大陸、中東、アフリカまで包摂する「一帯一路」構想のリーダーとなった。イスラーム圏、仏教圏、ヒンドゥ圏といった非キリスト教宗教的共同体をも包摂する広大な地域をまとめる力量をもつに至った。「キリスト教優越主義に基づく文化帝国主義ゆえ、欧米国家は植民地経営に失敗した」が、それに比して、中国的天下はイスラーム、仏教、キリスト教等世界宗教をも融和的に内包し、問題なくやってきた、という自負がそこにはある。もちろん、度重なる宗教関連「起義」やそれに対する苛烈な弾圧はここでは意図的に等閑視される。列強の圧力を撥ね退け民族を挽救するという清末以来の思潮の連続性の中で伝統主義が再発見され〔葛 2014a: 144〕、「中華民族大復興」「中国夢」という中国の過去の栄光を懐かしみつつ、現在に蘇らせ、自信を確認しようというキャッチコピーが現代中国の言語空間を覆っている。

ここで鄭和の登場である。明の圧倒的経済力と技術力・軍事力で威圧しつつ、東南アジア、インド洋沿線、アフリカ東海岸までの物流と人流を促進し多くの朝貢国を得た鄭和の時代は、天子の「徳政」が一番よく発揮された時代であると再規定される。ならば、その鄭和の事績を研究、展示、教育、顕彰することで、「一帯一路」構想を補強しようという考えが存在する。

1.4 回族の国民統合という成功体験

さらに、鄭和が雲南出身のムスリムで、現在の回族に当たるということも、中国の「一帯一路」構想にはプラスに働いている。中国約2,000万人のムスリム少数民族の中で、その半数を占める漢語を母語とする回族は、元時代を中心に中央アジア等から中国に移民した人々の子孫とされる。20世紀の初めまでは、彼らはアラビア語・ペルシア語・トルコ語等を駆使し、中国と中央アジア、東南アジア、中東の間を商業や巡礼のために遠距離移動し、同時に新知識や新物資も中国以外から入れる橋渡しの役割を担った。駱駝行や騾馬行など輸送業を担うものも多かったので、中国国内でも情報の伝達者かつ物流の担い手であった。華北の大運河沿いに回族の集落が点々と続くのにはそのような理由がある。また、中国どこでも主要幹線道路沿いにはハラールフード「清真」を掲げた食堂が点在するのもそのためである。

全国に散らばる回族は、1949年以降、正式に民族認定された。明清時代に地上の支配者=天子への服従を絶対者アッラーへの服従と読み替える二元忠誠論を使うイスラーム・ハナフィー法学の解釈が中国ムスリム（当時は回民、回回と呼ばれた）の間に確立した。

二元忠誠論は、近代になって愛国主義を正当化する法学解釈「愛国愛教」に再度読み替えられた。このことも、時の権力に盾突かない優等生少数民族としての回族の民族認定と関係がある [松本 2000]。反右派闘争や文化大革命の下で回族は苛烈な宗教弾圧を受けたが、改革開放後はその反動もあり、めざましい宗教復興がなし遂げられた。

宗教活動を政府の厳しい管理下におく「宗教事務条例」(2005年)にもかかわらず、中国政府は「愛国愛教」を教義内容に盛り込む限り宗教保護政策を採っている。これは、対外・対内関係の上でも中国政府に対して心証をよくするためにも重要で、主要清真寺(モスク)の新規建設に対する政府補助金も多額に上る。さらに、回族の一部は、1980年代半ばからアラビア語、イスラーム学習のために中東や東南アジア、パキスタン等に出国し、帰国後は、中国とイスラーム諸国との間の貿易関係を取り持つ主役となった。2001年の9.11以降は、中国政府はアラブ商人に迅速にビザを発給するようになり、義烏や広州にアラブ系商人が集まるようになるが、そこには外国でイスラームとアラビア語を学んだ回族青年が仲介貿易業者として働くようになっていた。いまや義烏は「現代の蕃坊」とも呼ばれ、中国一外国人商人が商売しやすい場所ともいわれている [松本 2010]。

ウイグル族が分離独立運動を画策したりテロを起したりというかどで、厳しい監視対象になっているのは周知の通りである。それとは裏腹に、反政府政治活動をせず、改革開放の理念に沿ったような商業活動を行ってきた回族は中国共産党にとっては国民統合の優等生である。その存在は、「中国は宗教にもエスニシティにも寛容である」という中国政府の自画自賛的主張にお墨付きを与えている。

1.5 現代中国で「英雄」となることの意味

さて、1949年以来中華人民共和国は、さまざまな政治キャンペーンを張って大衆動員を行ってきたが、そこには精神論によって単一の価値観へ向けて人民の凝集を図るといふ目論見があった。さまざまな英雄が時代によって意図的に作られてきた。

まず、1960年代では、イデオロギー、大衆運動の文脈での英雄が生まれた。革命と党への絶対的忠誠を誓いつつ若くして事故死した人民解放軍兵士雷鋒が代表的なものである。CNKIで調べると、「雷鋒」についての論文や新聞は全部で176,611本、「雷鋒精神」は133,322本となっている。

さらに、2000年代には孔子と儒教の価値が復活し、同時に歴史的伝統と国民道徳(八榮八恥)の強調がなされるようになった。それは、2004年の孔子学院の誕生とも軌を一にしている。「孔子学院」は318,717本、「孔子」は809,212本、「孔子+精神」は556,983本となっている。その数は、国父たる「孫文(孫中山)」203,142本、「孫中山+精神」157,709本のそれぞれ4倍、3倍強となっている。

新疆の辺境防衛をした愛国英雄として、近年その存在をクローズアップされてきた清代の将軍、「左宗棠」は25,841本、「左宗棠+精神」18,167本である。左宗棠は、回族側

からすれば清代の陝西、甘肅を中心とした回民蜂起で回民を百万人単位で殲滅・鎮圧した首謀者で、評判が悪い。その一方で、「鄭和」は、52,990本、「鄭和+精神」28,748本と、孫文には4分の1と及ばぬものの、左宗棠の2倍以上であり、なかなかの健闘ぶりである。少なくとも、鄭和は左宗棠よりは利用価値がある、ということであろう。

1.6 英雄としての鄭和

近年、鄭和は東西貿易、「和平」の使者、愛国者と讃えられ、中国の経済と文化を対外的に推し進め「感化」させたグローバルレベルの英雄とされている。この文脈で、中国政府系研究者の鄭和の語りには一定の特徴を見出せる。一言でいえば、中国と「一帯一路」構想の優れた点を歴史的人物の鄭和に仮託しようとするものである。代表的な論文「21世紀海上絲綢之路の戦略構想与建設方略」[全他2014]を見てみよう。

まず、1) 文化の多様性を強調する。アフリカ、東南アジア華僑・華人社会を結ぶ鄭和や三宝公廟、アフリカ東海岸に残る中国陶器の事績を語る。2) 朝貢システムの優れた点を強調する。反覇権、非暴力の儒教的礼に基づいたもので、覇権主義的コロンブスの航海との差をことさらに主張する。3) 平和主義を強調する。鄭和の航海は中国の平和精神を示し、軍事攻撃も植民地統治もしなかったとするものである。数千年の海のシルクロードは、中国人の平和精神を表すもので、鄭和はその代表という。最後に、4) 中国の指導者の優位性を主張する。すなわち、天下体系の継承者としての中国の指導者はシルクロード精神（鄭和精神）をもち、平和友好と互惠互利と寛容さで新シルクロードを建設できるとするものである。逆にいえば新シルクロード沿線の民は安心して中国の指導者に従えばよい、という中国中心の世界秩序を正当化した主張である。「一帯一路」構想への是認と平和の使者たる鄭和言説が数百年の時空を超えて渾然一体となっている。

同じような文脈で、1) 鄭和は愛国心をもっていた、2) 鄭和はチャレンジ精神をもっていた、3) 鄭和は各種宗教文化に寛容だった、4) 鄭和の艦隊の技術力は高かった、5) 鄭和は平和裡に中国の経済力と包容力を誇示し世界を感服させた、という言説は、さまざまな鄭和博物館内展示にも表れる。そのような博物館は、子どもから高校生まで学生を引率してくる「愛国主義学習基地」で、政治宣伝色の強いものである。

それは、ナショナリズムを喚起する「国民道徳」を体現する人物として、鄭和が表象されていることに他ならない。鄭和精神をもって愛国心をもち、指導者を信頼して国に奉仕し、恐れずに国内外で中国人の勇敢さを発揮し、宗教文化に寛容であるべし、科学技術立国として自覚をもつべし、テロでなく、平和的方法論によって、世界に飛躍すべし、という現代の中華民族の道徳的内容が鄭和に仮託されている。そこには、個人の尊重や人権、民主という近代国家システムで必須とされる要素は隠されている。

換言すれば、天下体系＝朝貢システムの延長上の「一帯一路」構想の中で、鄭和が活

用されている。GDP 世界第二位，人民元は世界通貨に昇格，AIIB に参加する国が後を絶たない，という事実に基づく更なる中国の大国の自信が，一見時代錯誤にみえる言説を支えている。

2 鄭和に関する墓や博物館，遺跡の言説分析と観光化

2.1 鄭和墓（南京）

この中華民族の英雄たる鄭和言説を支えるために，リニューアルを重ねているのが，中国国内の鄭和にちなむ遺跡や博物館，記念館であろう。特にここでは，永楽帝時代に都があった南京のそれらについて論述してみよう。

南京は鄭和にちなんだ場所が複数あるが，その中で代表的なものが改革開放後作られ，2005年に全面整備された南京南部の牛首山にある鄭和之墓である（写真1）。イスラーム式墓の様式をもつが新しい。墓所に達する28段の階段は彼が航海を続けた28年間を表し，墓に至る台座が7段になっているのは，7回の西洋下りを表す。隣接して整備された鄭和記念館でも，鄭和の偉大さと中国史の担い手・中華民族の偉大さを同一視するというコンセプトで展示されている。鄭和の死去地は明らかではないが，この牛首山を明の皇帝が墓地として選出したのは，付近に鄭和の誘いにのり朝貢し，南京で病没したブルネイ国王（浣泥国王）の墓（写真2）があることも大きいであろう（写真2は，従者や動物をかたどった神道の石像群をブルネイ王の墳墓側から見たもの。死後の王の権力を守る象徴的意味がある）。

さて，鄭和の墓碑記は，2005年の鄭和下西洋600周年の折に重修されており，そこには次のようにある。「宣国威，陸邦交，播文明，達財貨，功施百代，名垂千載」（写真3），さらには，資料陳列館の壁面には「熱愛祖国，睦隣友好，科学航海」と，現代的価値を大文字で付け加えている。展示の内容は，地図，パネル，主たる交易品陶磁器，当時の船の部品などである。



写真1 鄭和之墓（2015年8月，筆者撮影）。



写真2 ブルネイ国王墓の神道の石像（2015年8月，筆者撮影）。



写真3 鄭和像と墓碑記(牛首山)(2015年8月,筆者撮影)。

鄭和墓とブルネイ国王の墳墓を比べると、ブルネイ国王のそれは、丁重で重厚である。鄭和は王でなかったがゆえに、またその存在が改革開放後に脚光を浴びたがゆえに、にわか作りの感は否めない。また、交通手段が牛首山まで整備されておらず、人影も見えず観光資源とも言いにくい。それは、同じ南京でも孫文の墓のある中山陵が観光地として圧倒の人気を誇り、90元という高額の入場料にもかかわらず連日中国人観光客でごった返しているのとは対照的である。

なお、鄭和の兵士500人あまりが南京で鄭姓に改姓し、その墓守をした、という伝説が存在する。ちなみに、後述する龍江宝船廠遺跡の資料館のパネルでは、鄭和はインドの Kolkata 付近で死亡した説をとる。

2.2 静安寺(南京)

静安寺は、鄭和の航海の安寧を願い永楽帝が「四海平静」、すなわち、天下泰平を祈念し建立(1411年)した。アヘン戦争後に南京条約が締結されたことでも有名な寺である。ここにも2005年の鄭和下西洋600周年を記念して作られた鄭和紀念堂が存在する。

鄭和紀念堂では歴史的事象を説明した詳細なパネルや、朝貢国や朝貢の人々、キリン、孔雀、ライオンなど海外から渡来した珍動物のレリーフが壁一面に陳列されている(写真4)。鄭和の「偉大さ」に言及した、指導者の言葉も随所にちりばめられている。例えば、台座を入れれば2メートルはゆうに越す鄭和像の後ろに控える孫文題字の匾額「超前軼後」(写真5)や同じく孫文の「今の南海人は、当時の鄭和のチャレンジ精神や威風を今でもしのんでいる。中国は活力があったのだ」という言葉がそうだ。また、改革開放後では、鄧小平の「鄭和の西洋下りは開放そのものだ。開放しないのはだめだ」が提示されている。さらに、江沢民「鄭和の西洋7回下りは感慨深い。中華民族が歴史上、力を尽くして各国人民と往来し、文化経済交流を図り、美しい未来を共同で作った」という発言も掲げられる。



写真4 静安寺キリンレリーフ
(2015年8月, 筆者撮影)。



写真5 静安寺の鄭和像
(2015年8月, 筆者撮影)。



写真6 鄭和宝船のレプリカ (2015年8月, 筆者撮影)。



写真7 宝船レプリカの砲台 (2015年8月, 筆者撮影)。

改革開放下、歴史的人物鄭和をどのような文脈で語るかに関して、最高「政治指導者」が説明してくれていることがわかる。特に、江沢民が、「中華民族」の貢献として鄭和の南海遠征を認識しているのは、彼の時代、教育の愛国主義路線への急シフトとも関連があるであろう。

2.3 龍江宝船廠遺跡（南京）

南京市街の西部、長江沿いに鄭和の「宝船」の造船廠跡がある。1950年代以降発掘調査が行われ、文革の中断をまたいで2002年から建設が進み、2005年の鄭和下西洋600周年以降、大規模投資が行なわれ、建造物と植樹を含めた公園整備がなされた。国家AAA級旅行景観区、全国重要文物単位となっている。造船所跡の池を利用した3つの長細い巨大な池（長さ430-450メートル、幅40-50メートル）がある。その中央の池には、復元された当時のままのスケールの宝船のレプリカがあり、乗船もできる。全長71.1メートル、幅は14.05メートル、マストは38メートル、明代の造船技術の一端を理解すること



写真8 龍江宝船廠遺跡を囲む朝貢のレリーフの壁(2015年8月,筆者撮影)。

ができる(写真6)。また、「平和の使者」という公的言説とは裏腹に、攻撃用の砲台なども復元されており(写真7)、戦艦の一種であったことも理解できる。火薬や爆薬のパネル説明も船内では豊富である。

さらには、公園の北側の壁面には一面に、鄭和下西洋の折に明の皇帝の勅使である鄭和に恭順の意を表す現地人、朝貢の様子、キリンやシマウマなど珍しい動物や品物の取引(写真8)や鄭和航海図のレリーフがあしらわれている。レリーフは一見イランのペルセポリス遺跡壁面に描かれた周辺の国家のダレイオス王への朝貢図を思わせるコンセプトである。

また、鄭和に関する展示館も整備されている。そこでは、静安寺と同様に、陶器などの文物、当時の造船道具、発掘された材木、交易でもたらされた棕櫚で作られた靴の一部、コロンブスの船との比較パネル、さまざまな寄港地でのエピソードが整然と並べられている。

しかし、この公園の最大の特徴は、長江を背にして造船廠を睥睨するような高さ4トン、高さ4.2メートルの巨大な鄭和像である(写真9)。左手には海図を持ち、遠くを望



写真9 巨大な鄭和像(2015年8月,筆者撮影)。

む像は「大胆にして沈着，ただならぬ気概をもつ」世紀の航海家鄭和の様子を表し，中国国内外にある数ある鄭和像の中でも最大である。まさに彼の「偉大さ」を示して余りあり，この公園を作った地方政府の意気込みを物語る。ムスリムとしての鄭和については，南京の浄覚寺（清真寺＝モスク）にある比較的新しい碑文（1995年）に，浄覚寺は彼の7度目の航海後に改修されたと一行記述されるのみである。

南京のこれら3箇所の鄭和に関する遺構や記念館が物語るのは，南海から西洋（インド洋，アフリカ）まで皇帝の勅命を帯びた困難な旅を全うし明の威光を広げた中華民族の英雄として，鄭和とその遠征を表象し顕彰したいという現在の中国政府の意向である。換言すれば，3つのどの場所を訪れても観点や切り口に独自性や新味がない。

また「中華民族」の偉大さということ強調するにしても，いずれの場所も観光客を多く集めるに至っていない。鄭和関連グッズの土産物もほとんどない。それは，いまだに鄭和の知名度が中国国内で低いという証左であろう。ムスリムとして強調すれば，国内外のムスリム観光客にある程度のアピールをすることができるであろうが，その展示もほとんどない。考えてみれば，その遠征の旅のスケールといい，ムスリムであるというエスニシティといい，鄭和は「中華民族」≠中国人らしくない。漢民族を中心とする中国人は，農耕民族ゆえ，遠距離の旅を苦手としたはずである。

2.4 鄭和文化館（マラッカ）

マレーシアのマラッカは，東西交通の要衝で，鄭和の船団がインド洋に出るためには必ず通過しなければならなかった。マラッカにある鄭和文化館（Zheng He Cultural Museum, Melaka）は，世界遺産マラッカの中心繁華街ジョンカー・ストリートに近く，鄭和時代の官営船舶修理工場のあとに建っている（写真10）。官営船舶修理工場はマラッカ運河の北側のくぼ地にあり，マラッカのスルタンの王宮の目の前にあった。

展示内容は，以下の通りである。1）時代によるマラッカの生活様式，2）鄭和の時代の，マラッカと中国の交易，特に農業，工業，漁業，文化，宗教交流について。さら



写真10 鄭和文化館（2016年3月，筆者撮影）。



写真11 鄭和艦隊のジオラマ（2016年3月，筆者撮影）。

に3) 鄭和のマラッカへの貢献, 4) 宝船の模型やジオラマ, 5) 元明時代の陶器コレクション, 6) 鄭和が東南アジアのイスラームに及ぼした影響など。特に、ここで展示物として目を引くのは、鄭和の艦隊の精巧なジオラマである(写真11)。

また、どの展示物にもマレー語、英語、中国語の3カ国語で解説がつけられている。現地の子どもの修学旅行先や、大陸と台湾など中国人と多くの参観客を迎えている。これはマラッカが世界遺産となり、年間1,570万人も観光客をひきつける名勝地であることと、マラッカ王国形成につながる貢献者としての鄭和像が浸透しているからであると思われる。

博物館では、鄭和に関連する各国語の著作物やお土産品販売コーナーや、カフェなども完備し、中国と東南アジアの華僑・華人の祖先・被崇拜者としての鄭和を印象づける装置となっている。参観客の7割程度は中国系の人々で、2015年8月、2016年3月と筆者が2度訪問した時、博物館の中はほぼ中国語世界であった。展示も鄭和が東南アジアにもたらした中国文化の優位性を印象づけ、鄭和の偉業を顕彰する展示となっている。

ここでの展示のもう一つの特徴は、イスラームと鄭和の関係を明示していることである。パネルの一枚にはこうある「イスラームは13世紀には既にマレー半島に入っていたが、マレー半島のイスラーム化はマラッカ王朝成立後のことである。それ以降、商業が発展し、多くのグジャラート商人が訪問しイスラームをもたらした。1446年、スルタン・ムザッファル・シャーが即位し、イスラームが国教となった。その結果、マラッカは東南アジアの小メッカとなった。ムスリムの鄭和の航海も、東南アジアのイスラームの発展に大きな貢献を残した。」「鄭和は敬虔なムスリムであった」[Tan 2014]。

なお、筆者が数えただけで、鄭和の名前を冠したカフェや民宿、ホテルが6箇所マラッカ中心街にあった(写真12)。いずれも、コロニアル風と中国風の混淆した様式の建物である。

このように、イスラームを信仰するマレー人が60%を占め、なおかつブミプトラ政策でマレー人優先を掲げるマレーシアにおいて、少数派華僑・華人系の人々が自らもイスラームと関連し、中国文化とマレー文化の連結者であると自認するためには、たとえ彼らの先祖が19世紀から20世紀にかけて東南アジアに移住したとしても、15世紀の明の皇帝の勅使でなおかつムスリムである鄭和の東南アジア来訪は非常に都合がよい歴史的事実といえる。また、当然のことながら、華人の中にも東南アジアでイスラームに入信したものがいたので、そのような人たちも現在のマレーシア社会の構成員であることも強調される。例えば、1728年建設のマレーシア最古のモスク、マラッカのKampung Hulu's Mosqueは中国式建築物の影響を受けている(写真13)、という言葉説[劉 2004: 47]もその論を補強する。

換言すれば、中国の精神とイスラーム文化の良いところを併せ持つ東南アジアの華人像を、鄭和を使って再構築したいという欲望も展示から見取ることができる。



写真12 鄭和の名を冠したゲストハウス
(2016年3月, 筆者撮影)。



写真13 マラッカのモスク (2016年3月, 筆者撮影)。

これらの点は、南京の三つの博物館が政治的な意味で鄭和を「中華民族の英雄」と持ち上げることと大きな対比をなす。

3 鄭和の名を冠したシンポジウム, 平和財団

3.1 鄭和下西洋与文明間対話国際シンポジウム (2005年)

2005年は鄭和下西洋を記念して、多くの論文が出された年であったとはすでに述べたが、その年には、鄭和の名前を冠したシンポジウムが中国各地で開催された。

そのうち、筆者も招待され発表した「鄭和下西洋与文明対話国際研討会」(於：寧夏回族自治区銀川市, 2005年7月1-2日主催): 寧夏社会科学院, 協力: 寧夏大学, イラン駐華大使館文化処) について述べよう。ちなみに、論文を提出した発表者64名(うち、筆者を含め日本人3名, パキスタン人1名, イラン人3名, オーストラリア人1名)であった(写真14)。

このシンポジウムは、鄭和と「文明間対話」の文脈で開催された。後者は、ハーヴァード大学のハンティングトン教授が1990年代初に発表し、2001年9月11日の同時多発テロを受けて、さかんに取り沙汰された「文明間衝突」論に対するアンチテーゼである。中国に照らし合わせれば、イスラームと儒教が対立するということはありえない、なぜならば、鄭和が歴史的に存在し、明清期は「回儒」というイスラームを儒教的に解釈した劉智や馬德新など「回族」思想家が数々の漢文著作を著し、彼らのたゆまぬ努力で、中国文化とイスラーム文化は共存し、両者を融合させることに成功した、という文脈においてである。さらにいえば、中華文明内にイスラームを共存させてきたことの積極的価値や多文化をもって、イスラームを排斥し対テロ戦争の名目でアフガニスタン、イラクに対して無謀な戦争をしかけ無辜のムスリムを多数殺害したのにそれを正当化する覇権主義的な米国的価値へのアンチテーゼとしたいという思惑があった。

その会議の目玉は、イラン・イスラーム共和国ハーメネイ大統領の兄弟でイラン・モ



写真14 鄭和下西洋与文明對話國際シンポジウム
(2005年7月, 筆者撮影)。

ッラー・サドラー基金会主席, モッラー・サドラー哲学研究所所長のサイイド・ムハンマド・ハーメネイ教授の出席であった。彼は「智を求めよ, 中国までも」というハディースを引用し, 中国とその他文明は人類の文明構築に大いなる貢献をしていること, イスラームは他の宗教と宗教間対話を続けていること, 宗教間対話に関しては中国が素晴らしい成果を残していることを褒め上げ, 思想の発展, 人類の共存と平和を謳っている [楊 (編) 2006: 2]。

これは当時から進んでいた, 中国=イラン間の独自外交路線構築と繋がっている。2005年に, イランにとって中国はドイツに継ぐ2番目の貿易相手国となった。その前後に, 中国はテヘランの地下鉄工事を発注 [Harold and Nader 2012], テヘランには孔子学院を作った。その意味で, この会議は中国とイランの蜜月外交状態の嚆矢ともなった。当時, イランは米国を中心とした「国際社会」から核開発疑惑のかどで, 経済制裁を受けていた。イランは石油の輸出先を求め, 他方で経済成長のために絶対的に石油を必要としたのは中国であった。両国の意向は一致したわけであるが, そのために利用されたのが, 現イランのホルムズに寄航・交易していた歴史的人物でムスリムの鄭和であった。鄭和の時代, ホルムズでは真珠, 珊瑚, 琥珀, 宝石, 絨毯, 織物, 馬などが中国の絹織物, 陶磁器等と交易され, ホルムズ王は朝貢品としてキリン, ライオン, 馬などを贈った [宮崎 1997: 131-132] 故事が強調された。また, 鄭和の祖先のシャムス・ウッディーンがブハーラーというペルシア語文化圏出身というのもイラン側出席者の心証を良くするためには都合がよかった。

会議に提出され発表された論文は, 鄭和の来歴, 航海の影響, イスラーム文明との関係, 東西交渉といった歴史的考証から, 回儒による書物の解釈, イランの存在一性論哲学, キリスト教とイスラームの対話 (筆者による), 中国ムスリムの文化人類学的調査までと幅広かった。ただ, 一ついえるのは, 鄭和という人物とそれにまつわる事跡や現象を利用して, 中国と中東の大国イランとの関係を歴史と文化の観点から再認識させ, イ



写真15 洪崗子ゴンベイの回族（2005年，筆者撮影）。

スラームをも内包する中華文化の多元性を確認し，両国の外交関係，経済関係を強化させようというものであったことである。

この会議は，寧夏回族自治区で開催されたこともあり，エクスカージョンの目的地には当時建設中の中華回郷文化園やスーフィー教団フイーヤの洪崗子ゴンベイ（聖者墓）も含まれていた。後者では何千人もの回族大衆が動員され，会議訪問団は彼らに取り囲まれ歓迎された。東西交渉史の立役者，回族（ムスリム）と中華民族の英雄として鄭和の存在をイランの首脳陣に印象づける，という手法がとられていた（写真15）。また，動員された回族大衆も，自らの祖先のルーツの一つと信じるイランの法学者を迎え，大変な興奮状態にあった。

3.2 鄭和フォーラム クアラルンプール（2015）とドバイ（2016）

最後に，中国国外の華人と研究者，さらには「一帯一路」内の要人を集めた鄭和和平財団が主催する鄭和フォーラムについて述べよう。鄭和和平財団 Zheng He Peace Foundation は，2015年に馬海雲が中心となり，マレーシア，シンガポール，インドネシアなど東南アジア在住の華人のほかにドバイ，カタールなど中東やカザフスタンの華人に声をかけて基金化した財団である。馬海雲は1973年中国青海省生まれの回族で，現在米国籍を取得，Frostburg University の准教授である。唐人電視，CNNなどに登場し英語と中国語で中国のイスラーム政策，新疆政策，少数民族政策を批判する。菌に衣着せぬ論調は有名である。

さて，彼は基金を作り，「鄭和フォーラム」という国際会議を2015年（クアラルンプール），2016年（ドバイ）と2回開催した。3回目は，2017年，カザフスタンのアルマトイで開催する予定である。この鄭和フォーラムの趣旨は「中国とムスリム世界の学術交流を促進し，華人とムスリム間の理解と友情を深める」⁸⁾ということにある。その背景には，中国が大国となり，ムスリム国家もその影響を免れ得ないこと，ムスリムが多数



写真16 スラバヤの鄭和モスク(2016年6月,ドバイにて筆者撮影)。

派の国家も中国人が多数派の国家もいずれもマイノリティグループをもち、その人たちは国境を超えるネットワークをもつこと、また、義烏や香港、広州で中国を体験した海外ムスリムと、ドバイ、クアラルンプール、カイロなどに住む中国人は、二つの文化のはざまでお互いを尊敬し、深く理解する必要があること、中国とムスリム世界を文化的に橋渡しするプラットフォームが今まで存在しなかったこと、などが列挙されている。

したがって、この基金はさまざまな主体と共同して相互文化理解、少数民族の権利、信教の自由と寛容、多文化社会の調和を求め、中国とムスリム世界の間に横たわる諸問題を解決することをめざす。そのために、研究を行い、その結果をシンポジウム、研究集会などを各地で発表することを目的としている⁹⁾。

中国生まれの回族で米国籍の馬海雲が作った基金への寄付は何を意味するのだろうか？ 抛金した華人は、筆者がクアラルンプール、マラッカ、ドバイで出会った限り、マレーシア籍、シンガポール籍、インドネシア籍、カザフスタン籍、サウジアラビア籍等の実業家たちで、ホテル業、金融業、貿易業、通訳・翻訳業、メディア業などで財を成した人たちであった。ほぼ全員が中国語話者であった（筆者とはすべて中国語で会話した）。中国政府と一定の距離を置き、中国の宗教政策、過度なナショナリズムへ疑念をもちつつも、中国の東南アジア、中東進出のハブとして経済的利益を上げていると思われる華人たちであった。

例えば、ドバイで開催された鄭和フォーラムで鄭和和平賞を与えられたのはインドネシアのスラバヤの華人で、イスラームに改宗した柳民源（インドネシア名 Bangbang Sujanto）である。先祖が広東省出身の柳はスラバヤでコーヒー園経営や中国製什器販売で財をなした。彼が中心となって華人が抛金し2003年スラバヤで鄭和モスク（写真16）を建立した。その趣旨は次のとおりである。すなわち、インドネシアの華人は鄭和のことを「三宝大人」品徳が高く、法規を守り、さまざまな宗教にも寛容であったとして尊敬している。華人が抛金したこのモスクは鄭和精神と他民族国家インドネシアの諸エスニシテ

イが力を合わせて繁栄したインドネシア社会をつくることのシンボルとしたい、と¹⁰⁾。

インドネシアは華人人口が多いにもかかわらず華人性を出すことがスハルトの反共産主義クーデター以降困難であった。しかし、今や中国からの投資によって、中国が最大の輸入相手国になった。輸出相手国としては日本について中国は第二位である。インドネシア在住の中国人は「不法労働者」も含めて100万人近くに上るのではないかと、という観測もある¹¹⁾。ここでも、華人と現地のインドネシア人ムスリムを結ぶのが中国系ムスリムで、その友好の象徴として鄭和がモスク名としても押し出されているのは興味深い。

鄭和和平基金会は、一言でいえば、中国政府の「一帯一路」構想に掉さしつつ、ムスリムでなおかつ中国人としての鄭和像を描き出そうとしている。中国政府が公式に描きたい「中華民族」の英雄という鄭和像とは少し異なる。中国政府は原理主義、特にウイグル族が関与していると嫌疑されているISとテロリズムへの警戒から、イスラームと中国少数民族を切り離して考えるのを主流言論としている。それに対して鄭和和平基金会は鄭和のムスリム性を国際社会に強調することで、中国の公式見解から自由になれ、それによって「平和のイスラーム」という世界のムスリムの99%以上は賛同する自宗教像を中国とオーバーラップさせながら描きだすことができる。

この基金会は始まったばかりではあるが、マレーシア、ドバイ政府要人を顧問につけるなど注目度は高い。筆者も鄭和フォーラムのアカデミック・アドバイザーとして名を連ねている。今後どのような活動を展開していくのか、注目されるし、自らの研究者としての立ち位置を問われている。

結語

本稿では、現代中国社会と世界に広がる華人社会でさまざまに表象され利用される鄭和像を描きだした。中国国内では、特に2005年の鄭和下西洋600周年で、記念行事が多数行われた。遺跡の改修や各種シンポジウムがそれにあたる。そこでは、イスラーム圏との国際関係を重視した場合には「回族の英雄」として扱われたが、それ以外のほとんどのケースで、「中華民族の英雄」として表象された。それは、中国の政治指導者の言葉に現れるように、経済大国、天下体系国家中国が拡大しつつ進むべき方向性とも一致している。さらには、この傾向は習近平の「一帯一路」構想の中でさらに強調され、「中華民族」の精神の粋を集めた英雄として新たに立ち現れた。英雄の政治的文脈での資源化である。しかしながら、観光資源としてはまだ鄭和の知名度は低く、遺跡や記念館に多くの観光客を集めるには至っていない。

他方、中国国外の華人やムスリム、回族からすれば鄭和は「平和」なイスラーム、「平和」な中国文化を体現する英雄であってほしいということだ。「砲艦」を用いて威圧したという不都合な事実は忘却すべしということになる。移民先でのあるいは中国における

自らの脆弱な地位を向上させるために鄭和が資源として利用されているということだ。いずれにしても、「一帯一路」構想の中で、さまざまな人々がさまざまな思惑で歴史を再構築し、利用することが考えられる。世界でプレゼンスを増す中国とその影響下にある国々や華僑・華人、さらにはムスリムたちにとって、鄭和は単なる教科書上の人物でなく、これからもその姿をさまざまに変容させられていくことであろう。その意味では、中国のダイナミクスにまつわる言説にすでに鄭和は飲み込まれているといえる。

付記：中国とマラッカでの現地調査には、南京大学教授華壽氏、鄭和19代の子孫で南京鄭和研究会会長鄭自海氏、馬海雲准教授に多大な世話になった。ここに記して深謝したい。

本稿は、平成27年度～ 科学研究費補助金 基盤研究（A）「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」研究代表者（塚田誠之）の研究成果の一部である。

注

- 1) Zoe Murphy “Zheng He: Symbol of China's peaceful rise” <http://www.bbc.com/news/world-asia-pacific-10767321> (2016年11月29日閲覧)
- 2) すでに1903年9月には無記名で上海の日本系漢語雑誌『大陸報』という雑誌に「支那航海家鄭和伝」が掲載されている。梁啓超はこれを参考にしたのではないか、という説がある〔鄒 2011〕。
- 3) 中国航海日という中国政府が運営するサイトが中国にはあり、鄭和の論壇や海洋関係の安全保障関連事案・貿易事案など、豊富な内容を擁している。 <http://www.maritimeday.gov.cn/index.htm> (2016年12月6日閲覧)
- 4) 2016年6月に習近平主席はウズベキスタンの最高会議立法院で講演し、「一帯一路」構想について次のような実績を列挙した。「現在、70あまりの国と国際組織が『一帯一路』の建設に積極的に参加している。中国は『一帯一路』共同建設推進に向けたビジョンと行動指針を発表し、30あまりの国と協力協定に調印した。中国はまた、20カ国と生産能力協力協定に調印し、沿線17カ国と共に46の国外協力エリアを建設、中国企業の投資額は累計140億ドルに達し、現地で6万の雇用を創出した。このほど正式に発足されたアジアインフラ投資銀行（AIIB）の参加国数は、57カ国に達しており、シルクロード基金や中国・ユーラシア経済協力基金も発足された。中国は沿線国に毎年1万人分の政府奨学金を提供し、中国での学習あるいは研修に招いている。2015年、中国と『一帯一路』参加国との二国間貿易額は1兆ドルを突破し、中国対外貿易総額の25%を占めた。中国企業の沿線49カ国への直接投資額は前年同期比18%増の約150億ドルに達し、『一帯一路』参加国の中国に対する投資は同比25%増の82億ドルを超えた。」『人民網日本語版』2016年6月23日。 http://www.peopleschina.com/xinwen/txt/2016-06/23/content_722987.htm (2016年12月8日閲覧)
- 5) 日本のシルクロードブームは正確にいうと2回あった。第一回目は、満洲国建国以後の大陸戦略と日中戦争、さらには中央アジアへの進出を企図した時期（1933-44）、第二回目は1970年代-1980年代で、日中国交回復と経済大国日本の自信が重なった時期である。この時代、日本はその経済的成功の理由を多文化、多文明の終着点としての正倉院御物や大乘仏教に象徴される

ような日本文化の「ユニークさ」に見出そうとしていた。さらにはイザヤ・ベンダソンに代表されるような「日本人論」の隆盛と日本人のルーツ探し（例えば護雅夫の「騎馬民族論」）がブームとなっていた。それは、戦中の大陸における中国研究の遺産を再利用し、中央アジア地域という日中戦争の戦場にならなかった場所を「支那」でなく「中国」として認識することで日中戦争の責任を忘却し、日中友好と対中投資を促進しようとするもので、テレビ・映画・書籍など大手メディア事業とタイアップした文化現象であったといえよう [松本 2006]。日本高度成長期のシルクロードブームは、東アジアの「大国」は経済状況がよくなると自らのルーツを探し、中央アジアに目を向ける、という事象の先陣であったともいえる。新疆や青海など、現在であればかなり危険度が高い場所を海外旅行ブームが始まった頃の1980年代の日本人はよく旅行した。2016年現在は足が遠のいている事実を考えれば、時代の変化を感じ取ることができる。

- 6) 例えば、趙汀陽「以天下重新定義政治概念：問題、条件和方法」『世界經濟与政治』2015年6期という論文では、「天下は中国の特殊概念でなく、世界の普遍概念であり…天下体系とは世界共存の秩序となりうる。従って天下概念はすなわち、政治概念の再構築の出発点となる。」とする。
- 7) 中華民族の戦略・利益のための生存空間として「一带一路」を地政学的にとらえる論文としては、さしあたり、杜徳斌他「“一带一路”：中華民族的地緣大戰略」『地理研究』Vol.34, No.4, 2015を参照のこと。
- 8) <http://zhengheforum.org/?paged=4> (2016年12月25日閲覧)
- 9) <http://zhengheforum.org/?cat=11> (2016年12月25日閲覧)
- 10) <http://www.china.com.cn/chinese/zhuanti/zhxxy/876148.htm> (2016年12月25日閲覧)
- 11) http://www.bbc.com/zhongwen/trad/world-38412851?ocid=socialflow_facebook (2016年12月25日閲覧)

参考文献

〈日本語文献〉

上田信

2013 『シナ海域 蜃気楼王国の興亡』東京：講談社。

小川博（編）

1998 『中国人の南方見聞録—瀛涯勝覽』東京：吉川弘文館。

檀上寛

2013 『明代海禁=朝貢システムと華夷秩序』京都：京都大学学術出版会。

寺田隆信

1966 『永楽帝』東京：人物往来社。

1984 『中国の大航海者 鄭和』東京：清水書院。

荷見守義

2016 『永楽帝—明朝第二の創業者』東京：山川出版社。

松本ますみ

2000 「エスニシティとナショナル・アイデンティティ—中国イスラーム新文化運動と中国国
家」『現代中国の構造変動—ナショナリズム—歴史からの接点』pp. 99-125, 東京：東京

大学出版会。

- 2003 「中国のイスラーム新文化運動」小杉泰・小松久男（編）『現代イスラーム思想と政治運動』pp. 141-165, 東京：東京大学出版会。
- 2006 「日本の『歴史的ロマン主義』を考える—語られたものと、黙殺されたもの」佐々木寛（編）『東アジア〈共生〉の条件』pp. 91-125, 横浜：世織書房。
- 2010 「グローバリゼーションの下でのムスリム・ネットワーク—浙江省義烏市における移民を中心に」塚田誠之『中国南北の国境地域における多民族のネットワーク構築と文化の動態』（2007年度～2009年度科学研究費（基盤研究（B））研究成果報告書）pp. 9-30。

宮崎正勝

1997 『鄭和の南海大遠征』東京：中公新書。

山本達郎

1934 「鄭和の西征」（上）（下）『東洋学報』21(3): 374-404, 21(4): 504-556。

〈中国語文献〉

白壽彝

2003 『中国回回民族史』北京：中華書局。

馮承鈞

1934 「伯希和撰鄭和下西洋考序」『禹貢』半月刊2卷1期。

葛兆光

2014a 『何為中国』Oxford: Oxford University Press。

2014b 『中国再考—その領域・民族・文化』辻康吾他訳, 東京：岩波現代文庫。

2016 「現代国家と『天下』意識の軋み」『世界』885: 290-297。

劉宝軍

2004 『海外回族和華人穆斯林概況』北京：民族出版社。

穆克辛

2016 「中国の地域発展戦略からみる『一帯一路』」『北東アジア地域研究』22: 18-31。

全毅, 汪洁, 劉婉婷

2014 「21世紀海上絲綢之路の戰略構想与建設方略」『國際貿易』第8期。

人民教育出版社 課程教材研究所 歷史課程教材研究開發中心（編）

2007 『普通高中課程標準實驗教科書 歷史2』北京：人民教育出版社。

杜德斌, 馬亞華

2015 「“一帯一路”—中華民族的地緣大戰略」『地理研究』34(6): 1005-1014。

楊懷中

2005 「走進鄭和」『回族研究』第1期。

楊懷中（編）

2006 『鄭和与文明對話』銀川：寧夏人民出版社。

鄒振環

2011 「支那航海家鄭和伝—近代国人研究鄭和第一篇」『社会科学』No.1。

趙汀陽

2015 「以天下重新定義政治概念—問題, 条件和方法」『世界經濟与政治』第6期。

〈英語文獻〉

Harold, Scott and Alireza Nader

2012 China and Iran: Economic, Political, and Military Relations. Occasional Paper, CENTER FOR MIDDLE EAST PUBLIC POLICY International Programs at RAND.

Menzies, Gavin

2002 *1421: The Year China Discovered the Year*. London: Bantam Books.

Pelliot, Paul

1933 Les Grands Voyages Maritimes Chinois au Debut du 15^e Siécle. *T'oung Pao*, 30: pp. 237-452.

Tan Ta Sen

2014 *Cheng Ho and Malaysia*. Melaka: Cheng Ho Cultural Museum.